【 5 】

氏　　名	堀川史子（ほりかわふみこ）
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文博第 120 号
学位授与の日付	平成 11 年 1 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	文学研究科英語学英米文学専攻
学位論文題目	A Theory of Character, and a Study of the Heroines of *Tess of the d'Urbervilles* and *Jude the Obscure* （登場人物の理論及び『テス』と『日陰者ジュード』のヒロインに関する研究）
論文調査委員	（主査） 助教授 佐々木　徹　教授 豊田昌倫　助教授 宮内　弘

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，小説の登場人物についての研究を理論と実践の両方面から行うものである。すなわち，一方では，物語論の中でも研究が遅れていることがしばしば指摘されてきた登場人物（character）の理論的モデル化という分野の前進に貢献し，もう一方ではトマス・ハーディの小説に対する理解の深化を彼の小説の登場人物造形に焦点を合わせることによって試みることを目的にしている。

第１章では，アリストテレスから現代の研究者に至るまでの理論家達による文学作品における人物についての様々な概念や取り組み方を概観し，それらの相互的な関係を指摘しつつ，登場人物論の発展の経緯を考察する。構造主義文学論の影響，読者の意味産出行為に重点を置く現代の傾向，そして認知心理学との連携を試みる1990年代になってから現われてきた新しい方向性等にも批評的検討を加えた上で，筆者が「登場人物特性理論」（the trait-based theory of character）と名付ける理論的立場の優秀性を指摘する。

第２章では，登場人物分析の理論的モデルを提案する。最も効果的なモデルは，特性（trait）に基づく理論を展開している研究者達（シーモア・チャットマン，シュロミス・リモン＝キーナン，ユーリ・マーゴリン）の見解に修正を施し，それらと接点を持つ他の理論に基づく知見を取り入れることにより，構築することが可能だと考えられる。

チャットマンによる「特性のパラダイムとしての登場人物」論においては，物語の人物は，性格特性（例えば「大胆な」，「正直な」等）から構成されており，これらの特性とは読者の意識内において具体的な物語のディスコース（言説）から構築された抽象的表示である，と理解される。人物の特性はある一つの瞬間に顕示されることもあれば，あるいは時間をかけて次第に浮かび上がってくることもある。また，それは物語の途中や読書が終了した後に読者の意識の中で取り消されたり別の性質と取り替えられたりすることもある。登場人物の特性は，物語の事象の連鎖（sequence）からは分離されうる非時間的な存在であり，また，紙面上の文字からも独立した存在である。このように，この理論では，登場人物は物語内での役割（例えば，プロップの言う‘helper’等）によって定義されるのではなく，言語表現と等価扱いもされえない，自立した構築物であるという仮説が主張されていることになるわけだが，これによりチャットマンが目指しているのは，読者の直感的読書経験――我々は，プロットや人物の描写に使用された言語を具体的に記憶していなくとも，小説の登場人物を思い出したり，彼等の行動について憶測を働かせたりすることができる――のモデル化である。

ディスコースから性格特性を構築する過程が，すなわち，登場人物造形（characterization）である。しかし，この過程については，チャットマンの研究においては説明が十分なものではない。従って，「特性のパラダイムとしての登場人物」論を補足するものとして，この問題に重点をおいた研究を行っているリモン＝キーナンとマーゴリンの議論を検討することが必要となる。リモン＝キーナンは，読者が人物の性格の特質を構築するのに用いる情報源となるテクスト上の要因を整理して，これらを標識（indicator）と標識の補強（reinforcement）とに大別した上で，さらに細分化した類別を行う。一方，

マーゴリンの研究の成果は，性格特性の推論（inference）のもつ性質を明確にしたことにある。すなわち，人物造形の際の推論における前提（テクスト的要因）と結論（読者の導き出す特性名）の間の関係は，一多的（one-many），文脈依存的（context-dependent），蓋然論的（probabilistic），そして，取り消し可能（defeasible）なものなのである。

ここでチャットマンの理論を軸にした３人の理論家による研究を総合したモデルを考えてみると，このモデルには分析性と柔軟性という二つの利点が兼ね備えられていることがわかる。この枠組みにより，登場人物造形の複雑な過程，そして構築された登場人物が生み出す様々な文学的効果を，特性の概念を用いて分析的に記述することが可能になる。他方，このモデルでは，人物造形における不確定要素が認められているために，人物が単なる特質の目録と同一化されてしまうという硬直性は避けられている。加えるに，この理論的枠組みにおいては，いわゆる「立体的な」（‘round’）登場人物を取り扱うことも可能になる。「立体的な」登場人物とは，結論を出しえない複雑さを内臓した人物，親近感を覚えさせる一方で，言語に表現しきれないような不可解さをも帯び，いつまでも読者の脳裏に留まり観想を促すような登場人物である。

「特性」を軸にしたこの登場人物分析のモデルは，幾つかの他の理論的アプローチを部分的に取り入れることにより，より充実したものとすることができる。利用できる知見や方法を提供してくれるのは，筆者が「ディスコース重視のアプローチ」と呼ぶ理論的立場（その中でも特に，語用論と受容理論），認知・社会心理学的視点，そして文体論である。これらはすべて，読者の人物像構築の過程の重要な部分であるテクスト上の言語表現の解釈に関係してくる。この中でも殊に有用性（というよりもむしろ必要性）が強調されるのが，言語学を援用した文体論に基づく「語り」の分析である。なぜなら，どのような語り手が物語を語っているかは，読み手に入手可能な情報の量・性質・信頼度を決定し，読者と登場人物の関係を規定するものであり，結果として読者の性格特性の推論活動に直接影響を与えるからである。

第３章と第４章は，提案されたモデルの有効性を試す実践の場である。二人のハーディ小説のヒロイン，テス・ダーバヴィルとスー・ブライドヘッドが分析の対象となる。この二人は，批評家の間でも解釈をめぐって異論，論争の絶えない問題の登場人物である。第３章では，『テス』のテクスト分析にあたり，提案されたモデルを適用し，テスの人物像がいかに「立体的」，すなわち厳格な確定が不可能なものであるか，を検証する。テスの性格特性構築に用いられるテクスト上の要因は直接的明示的なものが多いのだが，それにも関わらず，テスという人物像は曖昧性を残し，その複雑さは深化していく。そこで特に注目されるのが，「純潔」という特性にまつわる問題である。テスが「純潔」であることは，この特質を語り手がテクスト中で明示的に言及するという直接的方法により，またそれよりさらに強い方法，すなわち作者ハーディが小説の副題の中にこの言葉を含める（‘A pure woman faithfully presented by Thomas Hardy’）ことで，主張されている。しかしそれにも関わらず，「純潔」という特性のテスへの確定的な帰属は究極的には不可能になる。その曖昧性は，問題の核心となる場（すなわち，アレックによるテスの「強姦」の場）での語りにおけるギャップ，まれではあるが急所で効果的に用いられる人物特性構築のための間接的情報源となるテクスト上の要因（例えば，他の登場人物を介して読者に与えられる情報等），そして，テスの人格における遺伝的要素（ダーバヴィル家の血に流れる「純潔」とは相容れない資質）の導入，によって引き起こされる。テクストを細かく分析してみると，テスの行動が道徳的に問題があると解釈されるような場合でも，語り手は，性格特性推論の直接的あるいは間接的情報源となるテクスト上の要因を巧みに配置することで，読み手の彼女に対する同情を保とうとする。例えば，エンジェルとの結婚を前にしたテスの行動を判断する際に，読者は，語り手のこの方法により，彼女に「不正直」という特性を帰属させることから注意をそらされる。また，テスの行動を左右するあらゆる情況を読者に知らせる一方で，表面上の事実のみに基づいてテスを厳しく判断するエンジェルに対し読者が反感を覚えるように差し向ける「語り」によっても，テスに対する読者の共感は保たれ，強められていく。このように，本論で提唱する登場人物特性モデルに即したテクストの分析により，テスが，曖昧性を保ちながらも親近感を与える「立体的」登場人物となっていく過程を厳密に記述することが可能となるのである。

第４章においては，つかみどころがなく不可解な女性として名高い『日陰者ジュード』のヒロイン，スー・ブライドヘッドの人物造形の分析に我々のモデルを応用することになるが，その際特に強調されるのは，文体論の有効性である。まず，スーの人物像を考えるのにそれが性の問題と切り離せないことを論じた上で，『ジュード』のテクストの語りの様式を分析する。その結果，この小説のスーに関わる記述の部分においては，彼女について間接的な情報，あるいは信頼できることが保証されていない情報が多く与えられていることがわかる。つまり，スーの外見や外面的な行動の描写，他の登場人物の彼女に対する意見等が，読者が彼女の性格特性を推論する手だてとなるテクスト上の情報源のほとんどを占めるのである。こ

のことが，スーという人物を把握することを困難にしている主な理由であると言えるのだが，注意深く調べてみると，この語り手は，ところどころで，スーの内面（知覚や心の働き）を垣間見せたりほのめかしたりしている。このような箇所を追って調べていくことにより明らかになるのは，彼女の男性に対する搾取的・操作的な性質であり，彼女の行動の背後にある性的動機である。但し，ここでいう「動機」とは明らかに意識的な意図ではなく，彼女自身も自分の行動の持つ意味はよくわかっていないという類のものである。また，スーの内面がある程度読者に知らされるこれらの部分は，語り手のスーに対する態度が読み取れるところでもある。そこで見えてくるのは，距離をおいた冷静な傍観者としての態度である。スーを特別視せず，彼女も他の人間と同様に性に支配される生き物であるとする，広い視野からの理解を語り手は提示している。つまり，性のない女（sexless）であるとの推測を促すような多くの要素がテクスト中に存在するにも関わらず，スーは実は非常に性的な存在である。ハーディは彼女の悲劇を，自分の必死の抵抗にも関わらず，また自分自身とジュードに払わせる巨大な犠牲にも関わらず，己を支配する性から逃れることができないという絶望状態として表現したのである。意識的な努力や意志とは無関係に奥深いところで働く自然の衝動を抹消することは不可能であるという点で，スーは，『日陰者ジュード』の出口のないペシミズムを具現する重要な物語の要素であると言えるだろう。

結論においては，ここで提出したモデルの改良の可能性を探るともに，本論から導き得る新しい仮説を挙げ，今後の研究の展望を述べる。

論文審査の結果の要旨

小説を読む，という行為は読者が想像力を働かせて作中人物とつき合うことと切り離しては考えられない。物語の筋を追う中で我々は登場人物の心理に分け入ってこれに同情を寄せたり，その行動に対して倫理的な判断を下したりする。書評等で「人物が描けていない」という表現がよく用いられるが，かくの如く断じられることは往々にして作品の決定的な失敗を意味している。このように作中人物は小説の中心的な要素でありながら，それをいざ吟味するとなると，主観的，情緒的な判断に傾きがちで，客観的で分析的な研究を行うことは極めて難しい。本論はそれを理論と実践の両面から試みたものである。

第１章では古代のアリストテレスから現在の批評家たちに至るまでの作中人物に関する論考が検証される。その上に立って第２章では論者自身の理論モデルが提示される。ここまでが前半で，論文の後半はその理論の実践に充てられ，第３章では『ダーバヴィル家のテス』，第４章では『日陰者ジュード』が取り上げられて，これらハーディ後期の代表的な二作の長編小説に於けるヒロインが考察される。

英語圏の小説論では1920年代にE.M.フォースターの提唱した「平板な」人物と「立体的な」人物の区別が有名であるが，これとて漠然とした分類に過ぎず，作中人物の理論的研究が進んだのはフォルマリズムや構造主義の影響が入った60年代から70年代にかけてのことであった。しかし，これらの研究は基本的には人物を物語の中で果たす役割（「援助者」「妨害者」など）によって分類したにとどまった。これに対してチャットマンは作中人物を「正直な」とか「賢明な」などの，名付けうる特性の集積ととらえて，それらを読者がテクストを読みながら統合していく過程，すなわち，読者の読書体験の実際を理論化しようと試みた。その観点からすれば，立体的な人物とは複雑で割り切れない，つまり，互いに矛盾するような特性を持つ人物，ということになる。このチャットマンの理論を修正・補強しようとしたのがリモン＝キーナンであり，マーゴリンであった。これらの研究者によって，情報源となるテクスト上の要因が分別され，さらにそこから読者が登場人物の特性を類推する過程がより明白になった。ここで論者はこの路線を踏襲しつつ，これら三人の理論にさらなる修正を加えて，新たなモデルを提出している。その際援用されるのが言語学の知見，すなわち，認知言語学や社会言語学，そしてとりわけ語学的なテクスト分析，いわゆる文体論である。これらが「語り」の問題に結びつけられる。読者が小説のテクストから得る情報は，それがどのような「語り手」から得られるかによってその質が大きく左右されるので，これは妥当な判断であろう。以上の理論的構築は，部分的に難なしとはしないが，全体としては極めて緻密なものであり，論者の力説するこのモデルの優秀性には説得力がある。

ハーディの創出した数多い魅力的なヒロインの中でもテスとスーについては批評家の解釈が大きく分かれてきたが，後半の実践編ではこの二人の人物が考察の対象となっている。テスはあくまでも受動的で，冷酷な運命の犠牲者なのか，それと

も力強い意志を持った女性なのか，議論の絶えない人物である。彼女は庶子を生み，殺人も犯すわけだが，それでも作者は副題で彼女を「純潔な女性」と呼んでいる。この「純潔」という特質こそこの小説の核心を握るものであり，それが如何に読者に印象づけられるか，がここでの分析のポイントとなる。先ず論者はこの人物が互いに矛盾する多くの特質からなることを丁寧に立証し，そして，結末部分ではそれまで物語の内容にコメントを加えることを躊躇しなかった語り手が控えめになっていることもあって，それらの矛盾は究極的には解決されないものであることを示す。従ってこの人物は「純潔」であるとも言えるし，そうでないとも言え，その謎は永遠に解けないのだとする。加えて，論者は犯罪者である主人公が読者の共感を喚起する過程をも解明する。ことに，語り手がテスの恋人エンジェルに対して様々な形で否定的なコメントを与えることで相対的にテスの位置を高めるという分析はその綿密さに於いて優れたものがある。

スーもまた，性的に冷淡で利己的なサディストか，はたまた因習の枠を破った独立心の強い新しい女なのか，多くの錯綜する議論を呼んできた人物である。この人物を分析するにあたり，論者は特に文体論に基づいた語りの分析の有効性を主張する。スーが不透明に終わるのは彼女に関する信頼に足るコメントを語り手が与えてくれないからである。このことはかねてから批評家の指摘するところであったが，論者はここでさらに微細な分析により，小説の後半では実はそのようなコメントが見られることを示している。そして，むしろジュードに対して語り手が寡黙になり，距離を置いていることを指摘した上で，このことが読者がスーに同情的になる誘因の一つとなる，と結論づける。また，語り手のコメントがスーの行動を支配する性的動機に関するものが多いこと，そして，それらの動機が彼女の無意識にある点にも考察が加えられている。

全体的に見て，認知言語学や社会言語学の有効性が理論編では説かれているのに，それが実践面で生かせていると言えないのが惜しまれる。論者自身も指摘しているように，異なったテクストは異なった分析方法を要求するので，ここに取り上げられたものとは質も内容も違うテクストでこのモデルがどれほど有効なものかを示すことが今後の課題となるであろう。

ある人物が「よく描けている」かどうか，は所詮理論で解明できる問題ではない。矛盾する特性を持っていればただちに「立体的な」人物になる，とは言えないはずである。そこには理屈を越えた読者の判断が必然的に関わってくる。しかし，このことは本論の価値を減じるものではない。本論の意義は読者がいかにテクストから登場人物を読みとるか，という過程をつぶさに追ったところに存在する。結論として謎の女性二人の解釈に決定的な裁定が下されたわけではないが，何故その裁定が不可能なのかがある程度まで明らかにされた，という収穫は確実にあったのである。

最後に，これは英語で書かれた論文であるが，その表現力の完成度には特記すべきものがあることを付け加えておきたい。

以上審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1998年11月26日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果，合格と認めた。